

■黒船の衝撃

○【質問】ペリーは日本に来るのに、東回りで来たのか、それとも西回りできたのか。

○【質問】ペリー来航の目的は何だったのだろうか。

○次の狂歌はどういうことを表したのでしょうか。

泰平の眠りをさます上喜撰たつた四はいで夜もねむれず

○日本は実際は何に驚いたのだろうか。

○「マニフェスト・デスティニー」(1845 オサリバン)

○ペリーの要求事項(久里浜で渡した国書)

- 1) 友好
- 2) 通商
- 3) 石炭、薪水供与
- 4) 難破船の保護

○阿部正弘

広く意見を求める

●開国関係年表

- 1825 (文政 8) 幕府、諸藩に対して異国船の打ち払いを命じる (2月)
- 1837 (天保 8) アメリカ船モリソン号、漂流民を伴い浦賀沖に来航、砲撃を受け退去〔モリソン号事件〕(6月)
- 1839 (天保 10) 幕府、鎖国政策を批判した渡辺崋山・高野長英らを収監する〔蛮社の獄〕
- 1840 アヘン戦争起こる
- 1842 (天保 13) 幕府、異国船打払令をやめ、薪水食料の供与を許す (7月)
- 1844 (天保 15) オランダ国王、幕府へ開国を勧告する (7月)
- 1845 (弘化 2) 幕府、オランダ国王の開国勧告を拒む (6月)
- 1846 (弘化 3) アメリカの捕鯨船ローレンス号遭難事件
- 1853 (嘉永 6) アメリカ使節ペリー、浦賀に来航し、大統領の国書により開国を要求 (6月) プチャーチンの率いるロシア艦隊が長崎に来航する (7月)
- 1854 (嘉永 7) ペリー、横浜に上陸し、日米修好通商条約の締結をせまる (2月)
日米和親条約調印 (3月)、吉田松陰が下田から海外渡航を企てる (3月)
- 1855 (安政 2) 幕府、江戸に洋学所 (後の蕃書調所、開成所) (1月) 長崎に海軍伝習所を設ける (7月)
- 1856 (安政 3) アメリカ総領事ハリス、下田に来航する (7月)
- 1857 (安政 4) 蕃書調所開校 (1月) 日米条約を下田で締結する (5月)
ロシア使節プチャーチン、長崎に来航する (8月)
ハリス、登城し、将軍に大統領親書を提出する (10月)
- 1858 (安政 5) 日米修好通商条約調印 (6月) 日蘭修好通商航海条約調印、日露修好通商条約調印 (7月) 安政の大獄始まる (9月)

●ペリーの日本人観察

①日本の技術について

「実際のおよび機械的技術において日本人は非常な巧緻を示している。……日本がひとたび文明世界の過去・現在の技能を有したなら、強力なライバルとして機械工業の成功を目指す競争者の一人になるであろう。……」

②好奇心と知識について

「読み書きが普及して、見聞を得ることに熱心である。……彼らは自国の事を知っているばかりか、他の国の地理や物質の進歩、歴史についてもかなりの知識を持っており、我々も多くの質問を受けた。……長崎のオランダ人から得た彼らの知識は、実物を見たことのない鉄道や電信、銅版写真、ベキサン式大砲、蒸気船などに及んでおり、それを得意気に語った。またヨーロッパの戦争、アメリカの革命、(G.)ワシントンや(ナポレオン)ボナパルトについても的確に語ることができた。……」

「艦上で目に触れる珍しいものについて、上流階級が示した知的関心と同様に、庶民達も、アメリカ人が上陸するたびに衣服などに熱心な興味を示した。日本人は街中でたえず士官や水兵を取り囲み、その身体や帽子から靴にいたる服装の各部分の英語名を身振り手真似で質問し、紙と筆を取り出しては控えを取った。……」

③日本人の労働と遊びについて
「日本人は激しく労働するが、時々祭日をもって埋め合わせをし、また夕方や暇な時間には勝負事や娯楽に興じる。……」

「若い娘は身ぎれいで美しく、立ち居振る舞いは大変に生き生きとして自発的である。それは彼女達が、比較的高い尊敬を受けているために生じる品位の自覚から来るものである」。

加藤祐三曰、黒船異言(岩波新書)あり

令和4年10月15日

■廃藩置県と中央集権国家の実現

○廃藩置県を武士はどう受けとめたか

グリフィス『明治日本体験記』より

(1)

七月十八日。――まさに青天の霹靂！政治の大変動が地震のように日本を中心から揺り動かし、その影響はこの福井でもよく観察できた。今日、町の武士の家には激しい興奮が渦巻いている。武士のなかには三岡（八郎）を殺すとおどしている者がいるという。というのは三岡は一八六八年の功績で収入を得、また福井で長い間、改革と国家の進歩の中心人物であったからである。

今朝十時に、東京からの使者が藩庁に着く。にわかには学校で騒動が起きた。日本人教師と役人が全員、学監室に呼び出された。数分後に会々と、その人たちの大方は顔が青さめ、興奮していた。中には大股で玄関へ出て、刀を帯に差し、下駄をはき、ゆるやかにたれた着物と絹羽織の裾を後ろへばたばたさせて急いで出て行く者がいた。その様子は全く芝居じみていて、日本の書物にある絵によく似ていた。

たった今といた天皇の声明によると、武士の世襲の所得を減らし、名目だけで任務のない役所を廃止し、それに付けた給金は天皇の国庫に渡すよう命じている。役人の数は最小限まで減らす、藩の財産は天皇の政府のものになる、福井藩は中央政府の一になったように、最小限度になった。学生が言うには、町の老人の中には心配で気が狂いそうな人がいるし、少数の乱暴者がまだ三岡らの天皇支持者を、こんな状態にしたのはお前らだ、殺してやると言っている。けれどもちゃんとした武士や有力者は異口同音に、天皇の命令を褒めている。それは福井のためでなく、国のために必要なことで、国状の変化と時代の要求だと言っている。日本の将来について意見あふくとして語る者もいた。「これからの日本は、あなたの国やイギリスのような国々の仲間入りができる」と言った。

(2)

十月一日。――今朝早くから袴姿の武士が告別の準備をして城に集まってきた。私は九時に大広間に着いた。この感銘を与えた光景は一生忘れないだろう。部屋を仕切っている襖は全部取りはずされて、大きな畳の間になった。そこに福井藩三千の武士が位階の順に並んでいた。各自、のりのついた礼服を着て、頭部を剃り、銃の撃鉄のようなちょんまげをつけて、正座して、自分の前にまっすぐに立つ刀の柄を両手でにぎりしめていた。この武士たちの垂れた頭はこの重大な事態から生じる思いでいっぱいであつた。それは封建領主との別れというだけのものではなかつた。自分らの祖先が七百年間生きてきた制度の厳粛な埋葬であつた。一人一人の表情が遠くを見つめているように思えた。その目は過去をさかのぼり、不確実な未来を探ろうと努めているように見えた。

私は武士の心の中がわかったと思った。刀は武士の魂、武士は日本の魂であつた。その刀がその名譽の場所からとり外され、無用の道具として捨てられ、商人の墨つぽと台帳のために道をあげねばならないのか。武士が商人以下になるのか。名譽が金銭より劣ると考えられるようになるのか。日本の心が日本の富を枯渇させようとする卑しい外国人の水準にまで下げられるのか。子供もまたどうなるのか。子供までが働き骨折、自分の糧をかせがなければならぬのか。武士の世襲年金が中止になったり、目録れ金にまで削られたらどうしたらいいのか。祖先が立派な騎士であり戦士であつた、その血と心を受け継ぐ武士が下層民と仕方なく混じらねばならないのか。娘を商人の嫁にやるくらいならいさぎよく貧しさに服死した方がいいと思う武士が、いまその家門を傷つけてまで、家族の生命を助け、腹を満たさねばならないか。これから先どうなるのだろうか。

前越前藩主、福井藩の封建領主、そして明日からは一介の貴人になる松平茂昭が、大広間へと広い廊下を進んで来た。おそらく三十五歳ぐらいのきびしい顔をしていた。紫の縞子の袴に、白い縞子の下着

と、濃い青みがかった灰色の絹縮緬の上着で、袖に刺繍がしてあり、背中と胸に徳川の紋のついたものを着ていた。帯にいつもの腰につける武器、脇差をさしていた。その短剣の柄は純金でできていて、彫刻とつや消しがしてあつた。白い足袋をはいた足が音もなく畳の上を動いた。松平が進んでいくと、武士は刀を右横にねかせて礼をした。そして松平は痛切な思いを言葉には出さずに、家来の居並ぶ中を大広間中央へと進んだ。そこでは筆頭の家臣によって、簡潔で立派な藩主の挨拶が代読された。藩の歴史、領主と家臣の関係の歴史、一八六八年の改革をもたらした原因と天皇家を元の権力へ戻したその結果、地方の藩主にその封土を返還せよとの天皇の命令の理由が、次々と簡潔に流暢に述べられた。終りに、藩主は家来全員にその忠誠をすっかり天皇と皇室に移すように頼んだ。それから落着いた適切な言葉で、家来の新しい関係、家来自身、その家族、財産の成功と繁栄を祈って、藩主は家来に厳粛な別れを告げた。

武士を代表して、その中の一人がみなを気持よく表わした挨拶をした。前領主としての藩主のことにも優しい言葉であつた。そして今後は天皇と皇室の忠実な臣民になる決意を宣言した。

(3)

十月二日。――今日は町じゅうが大騒ぎをしているように見えた。通りは暗着姿の町の人でいっぱい。田舎からも数千人がきている。みな藩主を最後にひとめ見にやって来た。それは告別の集まりである。数百人の老人、女、子供が泣いていた。千人の連隊が十二マイル離れた武生まで藩主を護衛する。忠実な家臣三、四人、侍医の橋本、侍僕が東京まで付いて行く。今日のこれと似た場面が、おそらく今月いっぱい日本の多くの城下町でまたたきに見られたことであろう。

*人びとが天皇の政府の命令に服従しないで、藩主を行かせまいとした藩もあったが、一般にどの別れも出立も、悲しく、静かで、礼儀正しかった。

【問題】明治維新の始まりはペリー来航です。では、明治維新の終わりはいつでしょうか。次の中からもっとも適切だと思うものを選びなさい。また、その理由も考えて下さい。

ア) 1868 年（明治元年）明治新政府の成立

イ) 1871 年（明治 4 年）廃藩置県

ウ) 1877 年（明治 10 年）西南戦争

エ) 1889 年（明治 22 年）大日本帝国憲法発布

オ) 1911 年（明治 44 年）条約改正

みんなの考えを出し合い、討論しましょう。